

## ほめる 松本康子

子育てする人で、「親が子どもをほめて育てる事が大切だ」という事を知らない人はいないだろう。

先日来、我が家は思わぬ出来事に見舞われているのだが、成長著しい子ども達が私の話し相手になって、助けてくれている。いろいろ相談に乗ってもらっているうちに、私が子どもを「ほめる」のがいかに下手かという話が出てきた。本当にそうだったのだろうかと考えてみると、どうやら日本とアメリカでは、「ほめる」言葉の表現の違いで、子ども達に私の感情がうまく伝わっていなかったというところに行き着いた。そのキーワードとなったアメリカでよく使われる、“Thank you for being my child. (私の子どもでいてくれてありがとう)”や“I’m proud of you. (あなたのことを誇りに思う)”という言葉がある。

次女いわく、「お母さんがもし、たとえばネネ（次女は長女をこう呼ぶ）をほめた事があったとしたら、それは学校の成績やピアノでもらった賞などのような、Achievement（ここでは何かを成しえた事とする）に対してだけでしょ？」と、思いがけない事を言われた。長女は忙しい高校生時代にも、自分の宿題をすませてから、眠いのを我慢しても妹たちの分まで手伝ってやるような（次女の告白から）、心根の優しい子だった。日頃から、そういう長女の優しい性格について、私自身は口にしていたつもりだった。ましてやアチーブメント云々というのは、絶対に違うという思いもあって、びっくりした。夫にしても、たとえば私が娘たちに意見をしてほしいと頼んでも、反って「うちの子はみんないい子なのに、何を怒る事があるの？」と言うくらいの人だから、当然、親の気持ちは子ども達に伝わっていると思っていたのだ。それなのに、この次女（姉妹の代弁者だと思う）の言葉は、一体どういうことなのだろうか？

私が、冒頭の“Thank you...”“I’m proud...”という言葉を知ったのは、学校の卒業アルバムの中からだった。

娘たちの通っていた学校では、卒業アルバム作りは生徒会活動の一部となっており、その中に、“Dedicated Page (贈る言葉)”というものがあつた。私にとっては企画自体がまったく異文化的で、とても興味を引かれた。それは、アルバムの最後の数ページを誰でも買い取る事ができ、個人的なメッセージを載せてもらうという物で、生徒会はその売上金を

製作資金の一部に当てる事ができる。そのページは、友人や親戚が卒業生に対して祝いのメッセージを書いたり、親が子どもの赤ちゃんの頃から高校卒業までの写真を貼って「こんなに大きくなったのよ」と、その成長ぶりを細かく書き記したりする事で、卒業というビッグイベントを飾るのだ。そしてその中に、ほとんどの親が前述の言葉を書いていたのだ。

最初その言葉を読んで正直、私なら恥ずかしくてとても言えないような、直接的な（大げさな？）表現だなあと感じた。だが、ほとんどの親がそう書いているのを繰り返し読んでいるうちに、アメリカでは、子どもに対する親心はこんな風に表現するんだなと思い、それならば、このようなカルチャーで育った我が家の子ども達のためには、私もこのやり方を習わなければいけないのだろうか、感じ始めたのだ。

とは言っても、我が家の子ども達はバイカルチャーを身につけているのだから、私が今さらそのような言葉をそのまま使ったとしても、多分違和感を持つだろうと思った事もあって、実行するには至らなかった。

考えてみると、私が子ども達を「ほめる」のは、「頑張ったね」「よく出来て、よかったね」「偉いね」「じょうずね」という、どうやら子ども達の「努力」する姿勢や目に見える「結果」をほめてきたようだ。これでは、私が子ども達の努力を「見守り」、結果が出なくても「大丈夫なのよ」という、

